

冬の雛

赤澤 藍

冬が来たねえ、とホームに規則正しく並べられた人たちの中の、誰かが呟いた声が聞こえた。白いイヤホンで塞いだ耳にも入って来たから、少し大きな声だったんだろう。当たり前前のことを大声で主張するなんて、と心の中で呆れながら、溜息を吐いた。白く染まったそれは、確かに、冬が来たのだと感じさせる。

明日からはマフラーをつけようか。でも、電車では暑いから、と考える。

冬は寒い。時々、その澄んだ冷たさが、ナイフのように鋭く肌を突き刺す。だけど、そんなことよりも、冬はいつも、私の周りを勝手に変えていく。

お母さんが出て行ったのも、お父さんが再婚したのも、弟ができたのも、冬だった。冷えた風がホームの中を突き抜けて、皆が揃えるように猫背になった。

弟が生まれた後に、お父さんは猫を連れて帰ってきた。茶色いトラ猫は見た目に反して大人しくて、家の中で寝てばかりだ。

パパも、ママも、弟も、猫のことだって、嫌いじゃない。ただ、受け入れられないだけだ。私の気持ちなんて知らないまま、どンドン、色んなものを勝手に奪って、勝手に連れてくる冬が、嫌いなだけ。

「ふゆ」

だから、この名前も、嫌いだった。

肩に置かれた手のひらを払いのけてから振り返る。迷わず睨みつけてやっても、彼はへらへらと笑うばかりだ。

「ふゆ、とちやう。とう。冬子」

「えー、でも、ちっさいころからふゆ、って呼んでたし」

「ヒヨはもうちっさくないやろ」

もう一度睨みつけると、最近一八〇センチを超えた幼馴染は苦笑して両手を挙げた。降参のポーズだ。

「わかったから、そんな顔せんといて」

ヒヨは、笑うと目がうんと細くなる。元々そうだけど、さらに、優しく、柔らかさそうな顔になる。

坂口日和。かわいくて、それでいて春みたいな、優しくて柔らかかな名前。

冬子。自分の名前を口の中で転がした。キン、と冷え切った冬の日に生まれた女の子。冬の寒い中で生まれたばかりの私を抱き締めた時のことを「あつたかくてしあわせやってん」とお母さんからよく聞いていた。そのまま温かく育ってほしくて、私はそう名付けられたと。それなのに、大阪では珍しく雪の降った寒い日に、私をおいて出て行ってしまった。

「なあ、冬子」

ヒヨは中学二年生の夏から、ひまわりみたいにくんぐんと背が伸びて、声も低くなっ

た。ヒヨに見下ろされることには、まだ慣れない。

「おれも、ヒヨじゃないんやけど」

電車が来るとアナウンスが伝える。私は、ヒヨを見る。ヒヨはいつものように笑っていた。

「ヒヨは、ヒヨやよ」

ヒヨコのヒヨ。いつまでも、優しく暖かな陽だまりに守られてさえずる、柔らかな生き物。ヒヨは、私とは違う生き物だ。

電車がやって来た。風が髪を揺らす。ヒヨのかさついた手が、私の髪に触れた。私はそれを、意識したりしない。だって、ヒヨはヒヨコだから。男と女の見分けもつかない、ヒヨコだから。

滑り込んで止まった電車が、長方形の生真面目な口を開く。飲み込まれるように、列に並んだ人たちがその中に入って行く。人が詰め込まれた生暖かい空気が、一気に肌に纏わりついた。

「冬子、こっち」

そうやって私を人のいない方へと引っ張ってくれる手が、声が、男の子のものになったって、ヒヨはヒヨコのままでいなければならぬ。外の世界も、恋も知らずに、優しくさえずる雛。

だってヒヨコは、大人になったら巣立ってしまう。守ってくれていた巣を飛び出して、恋をして、つがいを作る。

だから、冷たい冬の風に縮こまって、巣の中で震えていてくれなきゃ、困る。

「冬子、高校もコースそのままにするん？」

エアコンから吐き出されたうっとうしい風が顔に当たる。顔をしかめていた私に、ヒヨは何気なくたずねてきた。

私達は小学生の頃、一緒に中学受験をした。本当は私は一つ上のコースに行けたけれど、ヒヨは行けなかったから、ヒヨと同じコースを希望した。ヒヨと、巣の中で身を寄せ合っていたかった。

不自然に温かい風は、余計に冬の寒さを強調させる。

「コースは、上げるかもしれないへん」

成績的には足りている。先生にも「どうする？」と成績表を見ながら言われた。親御さんと相談してみなさい、と先生は嬉しそうだった。私もきつと、喜ぶべきことだ。

「わからんけど、まだ」

うつむいたまま、何も言えなくなってしまふ。ブレザーのボタンを握った。

「冬子？」

ヒヨが心配そうな声を出す。見上げれば、ヒヨは眉をハの字にして私を見ていた。純粹でキラキラと光る瞳は、いつだって優しい。

「ヒヨは？」

声が震えなかったことだけが救いだっただ。温かい風が喉の奥まで染み込んで、思った

よりも口が滑らかに動く。

「推薦、きてるんやろ。バレー」

ヒヨは、「知ってたんや」と苦笑った。

一昨日の放課後、職員室からの帰りに、寒い廊下で隣のクラスの子の噂話を聞いた。

「坂口君さあ」

それは、ヒヨのことだった。

「推薦きてんねんて」

「バレーの？」

うん、と耳の横で髪を結んだ女子がうなずいた。

ヒヨは、中学でバレーボールを始めた。元々努力家な上に身長も高いから、どんどん上達していたことは、知っていた。大会で活躍していることも、聞いていた。それでも推薦がくるほどだなんて思っていなくて、驚いたと同時に、とてもショックだった。

ヒヨは、私には何も言わない。その事実だけが、棘みたいに刺さっている。

「ふゆにも、言わなあかんと思ってたんけど」

冬子って呼べって言ったやん。心の中では、何だって言える。

なんで、こんなところで言おうとするん。こんな、生暖かい人混みの中で、まるで、どうでもいい話みたいにして。

電車が、学校の最寄駅に滑り込む。「降ります！」と身を寄せ合うサラリーマンに向かって叫んで、電車を飛び出した。

「ふゆ！」と声が聞こえた。後ろから追ってくる足音も、聞こえないふりをした。

ヒヨは、なんにもわかってない。

中学二年生の冬の朝、痴漢にあった。私に触れる、生暖かい手を思い出すと今でも気持ち悪くなる。ママが女性専用車両を使いなさいと言ったけれど、それでも、私はいつも二両目に乗る。階段が近いからじゃない。

そこにいたら、ヒヨが来るから。

次の日の朝、女性専用車両に行こうとしたけれど、なんだか負けた気がしていけなかった。いつも通り、二両目の列に並んでいると、「ふゆー」と嬉しそうな声が聞こえた。昨日は同じクラスなのに、一度も目を合わさずに過ごした。

「おはよう」

顔を赤くして駆け寄ってくるヒヨは背が高くて、少し目立つ。恥ずかしくて目をそらすうと思うのに、そらせない。

「おは、よう」

気まずくて、スクールバッグの持ち手を握り締めた。ヒヨが立ち止まって、目の前で

笑って、初めて目をそらした。

「ふゆ。おれ、推薦受けへんよ」

ヒヨの息が白くなる。体温が上がっているのかもしれない。

「ヒヨ」

小さく呼ぶと、ん？ と優しい声が返ってくる。

「昨日は、ごめん」

ぼそぼそと謝ると、ヒヨが笑った。

「ううん、大丈夫やで」

*

二月の初め、体育の授業でマラソンが終わった後、皆が顔を赤くさせながら着替えていた。

「公立って、受験あるから三年生はマラソンないんやって」

「え、ほんまに？ めっちゃいいやん」

体の内側はまだまだ暑いのに、外側は汗で冷えて、寒い。タオルで汗を拭きながら、クラスメイトの話を聞いていた。

「公立行けばよかったー」

冗談っぽく天井を仰ぐクラスメイトに、何人かが笑う。

「でも受験は嫌やわ」

「ほんまに」

高校までエスカレーターで上がれるから、私達には受験がない。だから中学三年生の三学期だっつてずっと遊んでいられる。

「でも、受験ある人もいるやん。外部いく子とかさ」

他の子達に体を見られないようにしながら体操服を脱いで、キャミソールも素早く着替える。汗を吸ったキャミソールは少し重くなっていた。

「ああ、坂口くん、明後日やんな？ 冬子」

ヒヨと同じ、バレー部にいた花香が私にそうたずねてきた。「何が？」と聞き返すと、困惑した顔をする。

「え、だから、坂口君、明後日受験するんやろ？」

花香はそう言って、不思議そうな顔をして私を見た。

「何それ、聞いてへんねんけど」

焦って、こわばった声を隠し切れなくなる。体育の後、女子更衣室で着替えるのはいつも寒い。

キャミソールに包まれた、細い身体を隠そうともしないで、花香は首を傾げる。

「村山先生がそう言ってただけやから」

まあ、わからんけど。慰めのようにそう付け足された。

春になっても当たり前みたいだにヒヨが隣にいらつて信じていたのに。足先から冷たくなつていくみたいだ。

「推薦、切ったんちゃうかったん？」

花香に問いかけたつて、意味がないことは知っている。花香はそんな私を見て困った顔をして、「受験して、もっと強いところに行きたいんちゃう？」と言つた。

教室に戻つて、帰りのホームルームをしている時も、私はずつと、ヒヨの背中ばかり見つめていた。

「じゃあ気を付けて帰りや」

先生がそう言つて、皆が自然と帰り始める。私と花香は卒業文集をまとめる係として、残らなければいけないかつた。

二人で机をくつつけて、皆の書いた文集をホチキスで留めていく。たまに花香と昨日のテレビに出ていた女の子の話をしながら、手を動かした。

「冬子、いいん？」

半分くらい終わった時に、花香が突然そう言つた。驚いて、何のことか分からなくて首を傾げると花香はいたつて冷静に「坂口君」とヒヨの名前を挙げた。

「帰つたやろ。もう」

気にしてないとか、上手い嘘を吐ければいいのに。けして分厚くない、三年間の思い出が書き込まれた文集をホチキスで留めながらそう思つた。

「体育館におつと思うよ」

花香はそう言つて、私が手に持つていた文集を勝手に奪う。

「さつき、鍵なかつたから。今日部活休みやし、部活なくて練習するんなんか、坂口君しかおらんよ」

ヒヨが誰より努力しているのは、嫌と言つてほど知つていた。

体育館では、ヒヨが打つたボールが叩きつけられる音が聞こえる。体育館の床に突き刺さつてしまふんじゃないかと思つ程の鋭さで、アタックが決まる。

体育館の外の窓から見えるのは足元だけで、それでも、それだけで十分ヒヨだとわかつてしまふ。

薄暗い雲が空を低くして、息苦しく感じさせた。ぼつ、ぼつと雨が落ち始めてきた頃、制服に着替えたヒヨが体育館から出てきた。

「ふゆ？」

ヒヨは、驚いたように私を見る。

「ヒヨ」

何から言えればいいんだらう。言葉は喉につつかえたみたいだに、上手に出てきてくれない。

「ヒヨ、明後日、受験なんやろ。勉強、せんくていいん」

嫌味みたいな言葉しか出てこなくて、唇を噛みしめる。乾燥したそれは、少しだけ血

の味がした。

「聞いたんや」

誰から、なんてことも聞かずに、ヒヨは落ち着いた様子で笑った。困ったような、曖昧でよくわからないその表情は、昔はしなかった。

「推薦きてたところ、強いけど、全国大会には行かれへんから。勉強して、頑張ってみよくなって思ってた。でも、なんか。勉強ばかりして落ち着かんくて」

いつもより饒舌なヒヨが、一緒に帰ろっか、と誘う。その手には黒い傘が握られている。

ヒヨ、頑張ってた。私も頑張るから。離れても仲良くしてな。

言えない言葉ばかりが胸の奥に詰まって、息ができなくなりそうだと。

「……いやや」

ヒヨが、え？ と首を傾げた。

「嫌やよ、行かんとしてや」

言わないはずだった。思っても、言っただけにはいけないはずだった。それでも、一度箍が外れてしまえば、言葉は溢れ出してしまふ。

「ずっと一緒におるって言ったやん、どこも行かんとしてや！ 嘘つき、なあ、嘘つき！」
心の中でだめだって繰り返しながら、何度も何度も嘘つき、とヒヨを罵る。

「ヒヨなんか、どこにでも行っちゃええねん！」

思ってもない言葉で怒鳴りつけて、嘘つきはどっちだ、と自分で思う。

「ふゆ」

私の方へ手を伸ばしたヒヨを振り払う。乾いた音が鳴って、痛みが走った。

「ヒヨなんて、嫌いや」

駆け出した私の背中に向けて、ヒヨが何度も名前を呼ぶのが聞こえた。冷たくて、痛い、冬の雨の中を走る。

大嫌いだ。私なんて、大嫌いだ。

本当のこと以外は、ひとつも言えない。嘘つきになれたら、きっと、もっと優しくなれたのに。

駅に着いた時には制服の中まで濡れてしまっていて、迷惑そうな顔をされながら、電車に揺られて帰った。

家に着くとママが「風邪引くぞ」と笑いながら私をお風呂に入れた。

羊水みたいに温かなお風呂の中で、ずっと、傷ついたヒヨの顔を思い出していた。

その後、私はママの予言通りに風邪を引いて、三日も休んで、やっと学校に行けた時には、ヒヨの受験は、もう終わってしまっていた。

*

卒業式の後、最後のホームルームが終わって、一組から順番に、教室を出て行く。

どうせ来月にはほとんどのクラスメイトが同じ敷地内の高等部の校舎に移るのに、と思いつながら泣いている子達を見ていた。

春になったら、ヒヨはいない。

ヒヨは、男子に泣きながら囲まれていた。

学年主任をしていた先生が教室に来て「三組、出て」といつも通りのゆるい声で言った。その目は、少しだけ赤くなっている。

昨日二年生が必死になって掃除をしていた廊下に出ると、窓からの日差しに照らされながら、ほこりがきらきらと舞っていた。

いくら洗ってもなかなか綺麗になつてくれない、三年間で汚れた上靴で、廊下を歩く。いつもかかとを踏んでいる男子も、ちゃんと上靴を履いている。

「お前おらんくなったら、寂しいわ」

泣きながら肩を組む男子に、ヒヨは笑って答える。ヒヨは、泣いていなかった。いつか、忘れてしまうのだろうか。

肺の奥までめいっばいに吸い込んだ埃っぽい空気も、四階の窓からのどこまでも続きそうな景色も、薄汚れて学年カラーが分からない上履きの窮屈さも、丈の短くなった制服も、廊下の真ん中に引かれた謎の白線も、体育館に響くボールの音も、ヒヨも、わたしも、すべて、なくなってしまうのだろうか。

下駄箱で靴を履きかえて、外に出ると、少し冷たい風が髪を揺らす。グラウンドから砂が運ばれてくる。今日のためにセットした髪を庇って、女子がうつむく。

学校は、池を埋め立てたグラウンドだけがやけに広くて、いつも部活をしている生徒がたくさんいる。そこに誰もいないと、ひどく寂しい場所に思えた。

風は冷たいのに日差しは暖かくて眩しい。目を細めながら振り返ると、体育館を見つめるヒヨが目に入った。ヒヨがゆっくりとこちらを見て、目が合う。驚いたように開かれた瞳に自分が映っているのだと思うと、心臓が大きく動いた。

「冬子」

花香に呼ばれて、慌てて駆け寄る。胸につけたコサージュが取れてしまうんじゃないかと思うほどに風が強い。

まだ固い蕾のソメイヨシノの隣で、梅が咲いていた。

冬はもう、終わってしまったのかもしれない。ゴールの合図もなければ、よーいどんも何もなく、ゆったりと終わって、春になっていく。

保護者が手を振って卒業生を迎えていた。そのままそこで、記念撮影が始まる。

友達と写真を撮り終わると、それぞれ帰ったり、名残惜しく話し続けたりにしている。

花香と私は、その輪から少し離れた所で、二人でいた。

「ハナ先輩！」

花香を呼んだのは、ショートカットの女子バレー部の後輩だった。花香はすぐに部活の後輩に囲まれて、ごめん、と言いつながら離れて行く。

「ふゆ」

花香の背中を見送っていると、春の日差しのような声が降ってきた。振り返ると、ヒヨが佇んでいた。

「お母さんが、写真撮らせてって」

ヒヨの指差す先には、ヒヨのお母さんと私のママが一緒に立っていた。久々に、ヒヨの「ふゆ」と呼ぶ声を聞いた気がした。

「わかった」

ヒヨのお母さんとママはすぐにこっちに駆け寄ってくる。二人とも普段より化粧が濃くて、なんだか恥ずかしかった。

「日和、冬子ちゃん」

ヒヨのお母さんが、私に向かって微笑む。その目元が、ヒヨによく似ていた。

「ほら、隣。並び」

ヒヨのお母さんに促されて、二人で並ぶ。躊躇って、微妙な距離の出来た私達に何も言うことなく、二人して携帯をかまえて、シャッターを切る。

「冬子、笑って」

ママにそう言われて、口角を上げた。下手くそな笑みで、不自然なピースをする。

写真を撮られながら、本当に最後なんだ、と実感していた。まるで残り時間をカウントするみたいに、シャッターが切られる。もう、ヒヨの隣にいる理由なんて、どこにもなくなる。

「じゃあ、日和も冬子ちゃんも帰ろっか。車、乗るやろ？」

笑顔のヒヨのお母さんに対して、ヒヨは首を振る。

「お母さん達、先帰っててや」

ヒヨはママとヒヨのお母さんに向かってそう言った。バレエ部の集まりももう終わってしまっている。驚いてヒヨを見上げて、初めて、ヒヨと私の身長差が、前よりももっと開いていることに気が付いた。いつから、ヒヨはこんな風に、大人みたいな顔をするようになったんだろう。私は、知らない。

「最後やから、ふゆと二人で帰るから」

最後。心の中でそう唱えて噛み砕いて、喉の奥を締められるような感覚がした。泣きたいけれど泣けないでいると、ママが「ありがとう、日和くん」と笑った。

ママ達が私達に背を向けた後、ヒヨは困ったような笑みを浮かべて、私を見下ろす。

「ごめんな、勝手に決めて」

いいよ、なんて、まるでこうなることを期待していた浅はかな自分を認めるみたいで、言えない。うつむいて、口を閉じる。一緒にいたいという気持ちはまだ胸の奥で溢れていて、少しでも油断したら口の中からこぼれ落ちてしまいそうだ。

「ふゆ」

ヒヨが、私の手を握った。冷たくて、驚いてしまう。骨ばった大きな手に、ヒヨが男の子なんだって突きつけられる。握り返すこともできないまま、力の抜けた私の手を、

ヒヨが引いて歩いて行く。

まだたくさんの方がいる校舎の前をすり抜けて、ヒヨが真っ直ぐに向かう先が、どこなのか、分からないわけがなかった。

まだ冷たい風が、梅の花に触れる。

冬は、嫌いだった。自分の名前も、出て行ったお母さんも、パパもママも、弟だって、猫だって、ずっと、受け入れられてなんかいなかった。それでも、ヒヨが言ってくれた。

「ずっとふゆと一緒にやで」って、たったひとつ、馬鹿みたいに幼くて優しい約束を、お母さんが出て行ったあの日にしてくれた。

冬は、嫌いだ。終わったなら、ヒヨが、遠くへ行ってしまふから。それなのに、終わってしまふから。

本当は「ずっと」なんて言葉を信じられないくらい、私はもう子どもじゃなくて、でも、ヒヨと一緒にいることを諦められるほど大人じゃないことを、分かっていた。

体育館の裏口の前で止まったヒヨは、振り返って私を見ると、そっと手を離れた。包んでくれていた体温を急に失った私の手は、さっきよりもっと冷たくなる。

「ふゆ、おれ、ずっと言いたいことがあつて」

雑草まみれの、破れたフェンスに囲まれたこんな場所で、好きだとか、ありがとうとか、ごめんとか、そんなくだらしないことを言ったら、ヒヨの頬を叩いてやろうと思った。見上げたヒヨは不安そうに私を見つめたままだ。

「試験、受かってん。来月から寮に入って、ずっと、バレーやる」

真面目な顔をしたヒヨの言葉を聞いて、思わず、肩の力が抜けてしまった。ヒヨは、ヒヨだ。噂だってちゃんと回っていて、誰だってヒヨが皆と一緒に高等部へ上がらないことは知っているのに。私の嫌いな、だけど、心から欲しい、くだらしない言葉を、ヒヨは紡がない。

かっこつけることなんて知らない、不器用で真面目なヒヨを、大好きだと思った。まだ、一緒にいたいと思った。それでも、思うだけだ。

さっきまで私の手を握っていてくれたヒヨの右手を掴んで、ヒヨに精一杯の笑顔を見せた。

「ヒヨなんか、どこにでも行っちゃえばええねん」

吐き出した言葉は、吐息に混ざって、少しだけ白くなる。ヒヨはうん、とうなずいて、安心したような顔をしてみせた。

「おれ、色んなところに行くから」

手から伝わるヒヨの体温が優しく、このまま、離れなくなってしまう方がいいのに、と思う。

「そんで、たくさんお土産持って、ここに帰ってくる」

真っ直ぐな目で見つめられて、自然と笑みがこぼれ落ちた。

「あほやな、ヒヨ」

言葉は、強い風に乗せられて、ヒヨまで届く。

「そりゃな」

ヒヨはうなずいて、微笑んだ。

「そりゃで」

私も、ヒヨを見上げて、笑いかける。ヒヨに、笑ってほしかった。

空はきれいに晴れて、答辞で卒業にふさわしい日だと言っていたのを思い出した。
「バイバイ、ヒヨ」